

# 「ノモンハン事件」の前段階におけるフルンボイルの政治情勢について

暁 敏

2010.10.9

- I. いくつかの疑問—問題の設定
- II. 近代フルンボイルの歴史の整理
- III. 教育史の視点
- IV. 背景分析—まとめ

# I. いくつかの疑問—問題の設定

- なぜソ蒙に協力したのか？

近代フルンボイルの歴史の整理

- 諜報活動を可能にしたものは？

教育史の視点

- フルンボイル地域の内部情勢は？

背景分析



## Ⅱ. フルンボイル近代史の整理

- 「第一次独立運動」(1912)
- 「中露蒙三国キャフタ協定」→「フルンボイルに関する露中協約」→「特別区域」と指定され、民国政府管轄内の「自治区域」となる(1915)
- 「フルンボイル青年党」の結成(1917)  
郭道甫(メルセ)と福明泰(ボヤンゲレル)が中心

## Ⅱ. フルンボイル近代史の整理

- 自治の取り消し、完全に黒龍江省の管轄下に入る(1920年)
- 「フルンボイル青年党事変」:1928年6月「張作霖爆殺事件」→ソ連および外モンゴルの援助のもと、フルンボイル青年党による武装蜂起→再びフルンボイルの独立自治を求める

## Ⅱ. フルンボイル近代史の整理

- 満州国成立 → 凌陞興安北省長
- 「凌陞通ソ・通蒙事件」(1936)  
モンゴル全体に影響を及ぼす
- 「ノモンハン事件」

# Ⅲ. 教育史の視点

## 1982年センサス教育水準

	千人単位でみた各種教育を受けた人口数(人)				12歳以上人口の非識字率(%)		
	大学	高校	中学校	小学校	合計	男性	女性
全国	5.98	66.2	177.5	353.7	31.54	19.15	45.23
全国少数民族	3.73	45.4	122.3	301.9	42.54	29.66	55.85
全国ダフル族	15.84	105.3	235.3	331.7	17.82	15.03	20.82
内蒙古自治区	5.71	74.6	193	327.7	31.08	21.68	41.48
内蒙古自治区少数民族	8.04	80.9	170.5	333.5	28.39	21.02	36.32

尹宇「達斡爾族人口」(『達斡爾族研究』第4輯、1989年、260頁)および吳依桑「達斡爾教育史述略」(『民族研究』1997年第4期、54頁)

# Ⅲ. 教育史の視点

- 1634年、黒龍江とゼヤ河流域一帯を支配していたバルダヂ(巴爾達齊)が満州人に帰順
- 1636年、皇太極の姉と結婚
- 17世紀から18世紀にかけて、「ジュンガルの乱」の平定に貢献
- 清朝に重用され、将軍、大臣、都統、副都統等が続出し、フルンボイル地域における政治的地位を固めていた。

# Ⅲ. 教育史の視点

- 17世紀から清朝がモンゴル地域で「盟旗制度」を実施
- フルンボイル地域は内外モンゴルのどちらにも編入されなかった→「満州八旗体制」
- 世襲制の王公が存在しないため、出生のルートが限られる

# Ⅲ. 教育史の視点

- 1695年から「墨爾根城八旗学堂」に入学
- 1905年、瑗琿、墨爾根に初級小学校
- 1910年、大きなダフル人村落に初級小学校が普及
- 1919年、郭道甫が「フルンボイル蒙旗小学校」(のちに中学校)を設立、のちにロシア語教育を導入
- 1929年に郭道甫が「東北蒙旗師範学校」校長に就任。日本への留学生が増加

# Ⅲ. 教育史の視点

\* **ソ蒙留学生数** : 1945年まで41人中**34人**(男

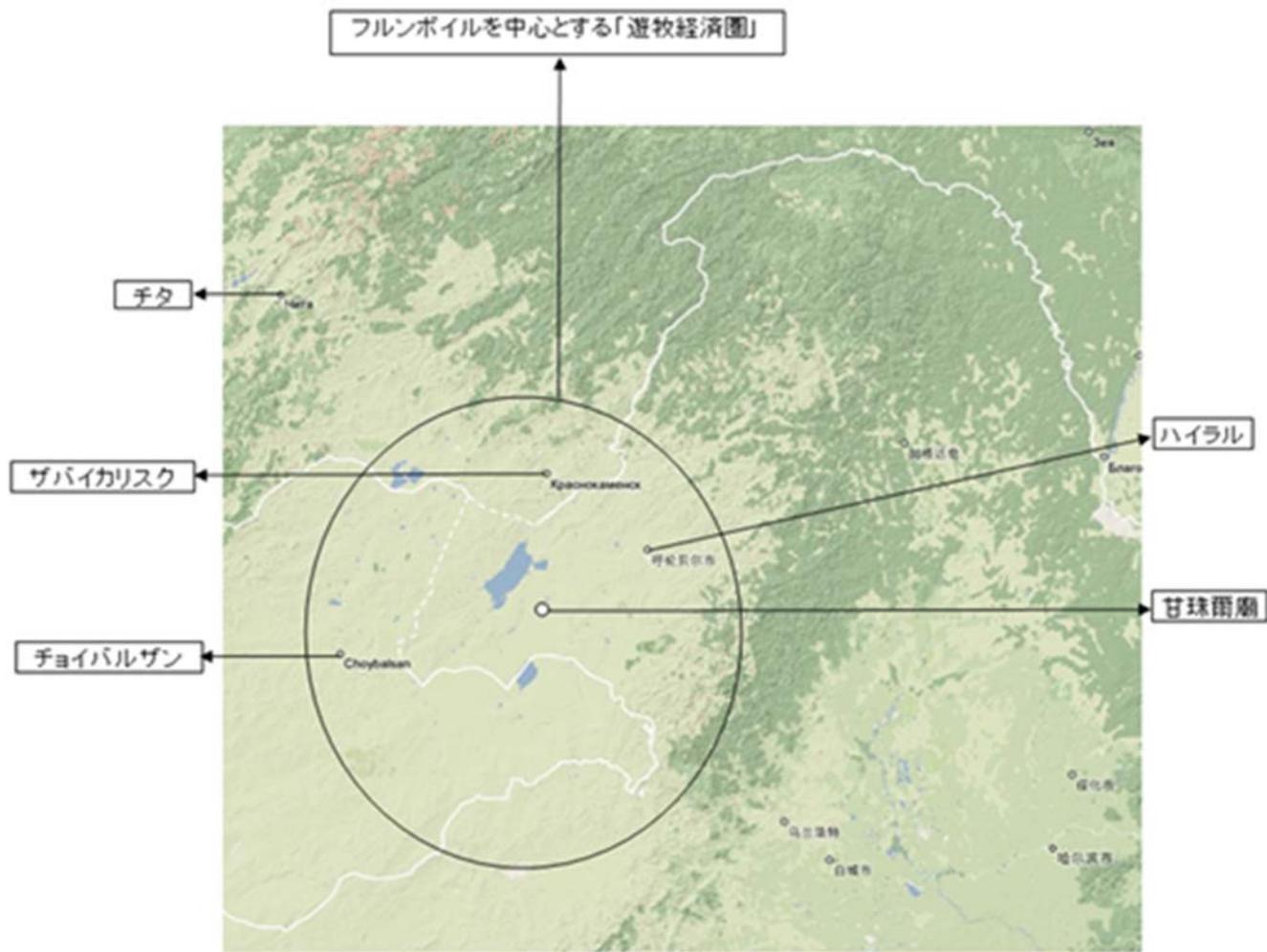
女合計)が**ダフル人**(蘇日嘎拉図『呼倫貝爾民族教育史略』民族出版社、2001年、72~82頁)

\* **日本留学生数** : **71人**、**女性5人**(同上書、142~145頁)

※政治の舞台に活躍する人物を輩出、フルンボイル地域の官職をほとんど占め、その地域の実権を握り、政治的に主導的な立場にあった。

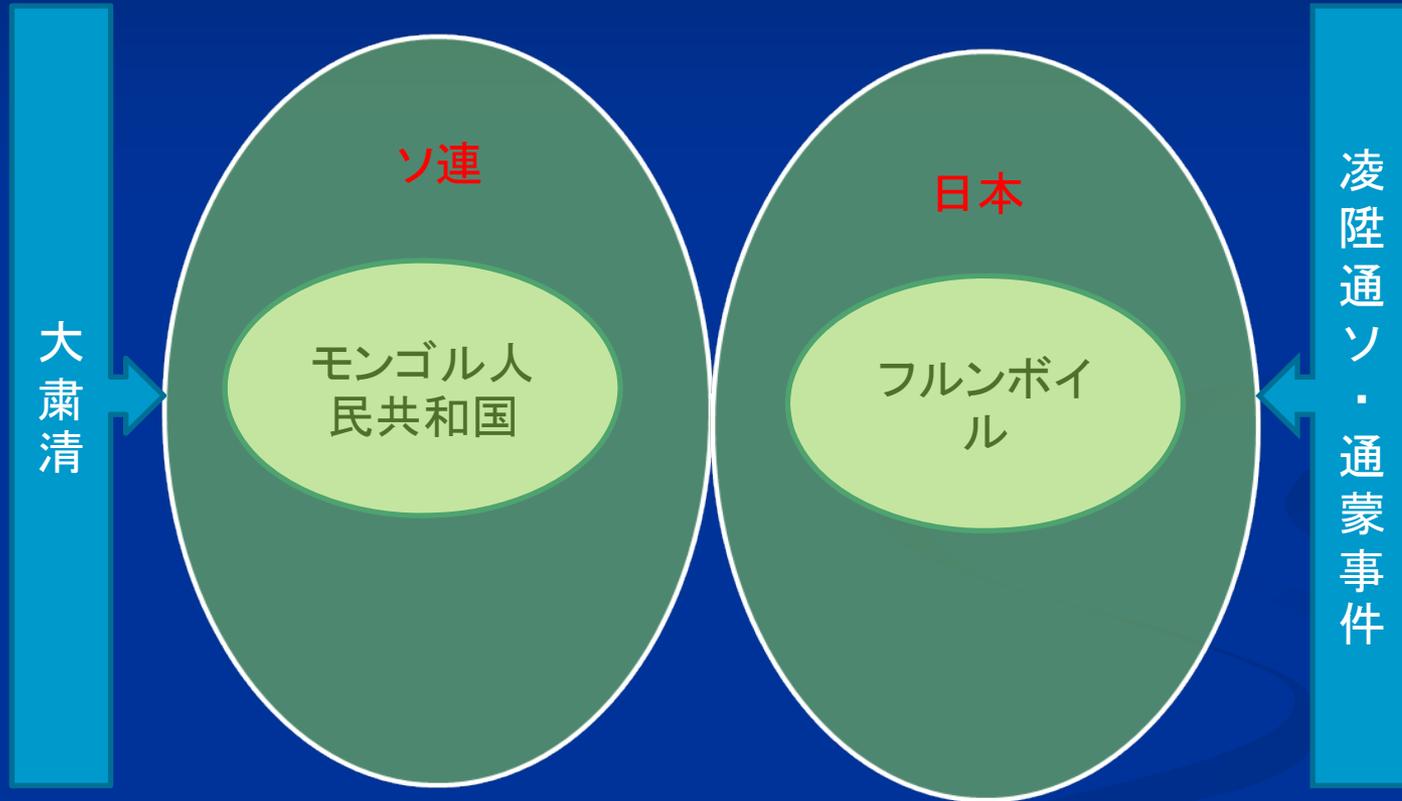
■ **郭文通の例**(呼斯勒「満州国軍少将郭文通について—自治主義者・ソ連軍諜報員としての生涯」(『日本モンゴル学会紀要』第31号、2001年)

# IV. 背景分析—まとめ



出所: Google-地図データより筆者作成。

# IV. 背景分析—まとめ



## IV. 背景分析—まとめ

- 近代の政治的動向：強いモンゴル民族主義
- 最終の目的：内外モンゴルの統一

例えば：満州事変前後のボルドの動き

「ハダ事件」(厲春鵬他『諾門罕戦争』吉林文史出版社、1988年、34～37頁)

- フルンボイル内部：「凌陞通ソ・通蒙事件」による日本に対する不信
- 大粛清の影響